

上級、超級の叙述における2字漢語の使用

—韓国語母語話者のOPIデータを使用して—

高木 南欧子

Abstract

This study analyzed two-character kango from intermediate, advanced, and superior Oral Proficiency Interview test (OPI) data, revealing characteristics of their usage. The results highlighted a significant difference in the variety of Chinese character combinations between advanced and superior levels, surpassing the disparity observed between intermediate and advanced levels. The richness of Chinese character combination vocabulary emerged as a crucial language skill supporting tasks at the superior-advanced level.

Comparing superior-advanced Chinese character combinations with native Korean, approximately 85% shared the same form in both languages, while about 15% did not. The main difference between Chinese character compound usage of advanced and superior speakers was that superior speakers made no errors from following the native Korean language constructs.

キーワード：漢語、抽象性、韓国語、OPI、学部留学生

1. 研究の背景と目的

2021年、文化審議会国語分科会の審議を経て、文化庁から「日本語教育の参照枠（報告）」が公開された。この日本語教育の参照枠では言語教育の柱が3つ示されており、一つ目の柱には「日本語学習者を社会的存在として捉える」という記述がなされている。

学習者は、単に「言語を学ぶ者」ではなく、「新たに学んだ言語を用いて社会に参加し、より良い人生を歩もうとする社会的存在」である。言語の習得は、それ自体が目的ではなく、より深く社会に参加し、よ

り多くの場面で自分らしさを発揮できるようになるための手段である。「(『日本語教育の参照枠(報告)』p.6)

この日本語教育の参照枠から考えると、学士課程に在籍する留学生は新たに学んだ日本語を用いて学修に取り組み、よりよく学業を修めようとする存在となる。これは「大学等の教育機関で専門的な内容を学びながら身に付けていくレベル」(『『日本語教育の参照枠』の活用のための手引き』p.7)として示されているCレベルに相当する。

Cレベルにおける具体的な言語活動は、具体的な実践例の報告がまだ少なく、概要が掴みにくいため、研究の蓄積が比較的なされており、データベースも整っているACTFL(The American Council on the Teaching of Foreign Languages: 全米外国語教育協会)のACTFL Proficiency Guidelines(ACTFL言語運用能力基準)と参照し、言語活動と併せてレベルの概観を試みる。探したところ、この2つの尺度を比較している公式な記述は見つからなかったが、日本語教育の参照枠とCEFRに大きな違いはないと考えられることから、ACTFLの公式ウェブサイトに掲載されている比較表¹(Assigning CEFR Ratings to ACTFL Assessments, p.4)を見る。これによれば、日本語教育の参照枠における「話す・書く」といった産出としてのC1は、ACTFLの上級-上に、C2は超級に相当すると考えよう。

一般的に、学部留学生の入学時の日本語能力は、B1からB2であることが多い。日本語教育の参照枠においてはB1、B2レベルの話者は自立した言語使用者、その上のレベルのC1、C2は熟達した言語使用者と呼ばれている。ACTFLの基準では、B1は中級-中、あるいは中級-上、B2は上級-下、あるいは上級-中である。学部入学時の留学生が自立した言語使用者であるとする、彼らが熟達した言語使用者となり、キャンパスの多くの場面で自分の力を発揮できるようになるためには、中級から上級、さらに超級へと日本語力を高めていく必要がある。したがって、能力のフロアが上級である場合、コースカリキュラムの前提となるレディネスを上級の下限に設定し、設計を行う必要がある。また、そのためには、上級と超級レベルの産出的言語活動において用いられる語彙や統語的特徴を明らかにする必要がある。

「超級話者は具体的にも抽象的にも裏付けしながら話せるのに対し、上

級話者は、具体例のみによる裏付けしかしておらず、また、概念的な内容に対しても、具体的にしか返答」しない（荻原他 2010、p.95）という指摘がある。確かに、抽象的、概念的な叙述を行う際のOPI²（Oral Proficiency Interview Test）データを聞くと、上級話者と超級話者の違いには、事前の準備なしに、適切な語彙の選択を即応的にできる言語能力の差があるように感じられる。留学生が直面するコミュニケーション言語活動の課題は、「聞く・読む」といった受容ではなく、「話す・書く」といった産出に関わる活動であることが多いが、これは、談話を産出するためには即応的に適切な語彙を選択する日本語能力を鍛える必要がある。それでは、上級、超級において使用される語彙や談話構成は具体的にどのようなものがあるのか。また、それらをコースシラバスに組み込む際、どのような注意が必要だろうか。

高木（2015）は、上級や超級で行われる抽象的な話題の叙述において、漢語がどのように使われているのかを分析した。中級と上級の韓国語母語話者の日本語のOPIデータを比較し、上級レベルの発話においては、漢語の使用が増え、抽象的な語彙が多く使われていること、使用された漢語の多くは韓国語にも同形の漢語が存在していることを明らかにした。本稿では、コースシラバスの設計改善を視野に入れ、超級OPIデータにおける漢語の選択を、中級、上級と比較し、どのような特徴があるのかを明らかにする。

2. 先行研究

高木（2014）では、上級レベルにある学部留学生4名に対し日本語によるOPIを実施し、助詞の誤用について分析を行った。この調査の主目的は上級レベルに出現する助詞の誤用であったが、調査の過程において「名詞＋を＋する」のように助詞「を」が入るべきところを、「釣りする」「殺人する」のように「を」が脱落する誤用が見られた。韓国語では、特に会話などにおいて「を」にあたる'eul'を省略することが多い。また、「する」にあたる'hada'を名詞につけて動詞に派生させることが日本語よりも容易であるため、このような負の転移が起きるのだと考えられる。

尹（2014）、尹（2016）では、韓国語の漢語動詞、及び漢語形容詞の使用について分析を行っている。前者では、日本語の「2字漢語＋する」と韓国語の「2字漢字＋hada」の対応の有無について膨大な量の2字漢語が

調査され、日本語から韓国語を見た場合、発生する非対応の種類は8にも上ること、また、そこから学習上の負の転移が起り得ることが示されている。後者では、分析対象の範囲を2字漢語動詞から6字漢語動詞、6字漢語形容詞にまで広げ、2字漢語動詞が漢語動詞全体に占める割合が74.7%の比重になっていること、2字漢語動詞の次に3字漢語動詞、4字漢語動詞が多いことが示されている。

語彙研究に関しては、山内（2004）がデータ数と異なり語彙的形態素数の関係を示し、実質語の出現が話題に大きく左右されることを示している。また橋本（2014）は、「YNU書きことばコーパス」におけるタスク内の語彙の多様性について調査を行い、「小学校新聞での昔ばなし紹介」「悩み相談の手紙」といった説明型のタスクの場合、語彙多様性が大きくなることを指摘している。

3. 調査について

高木（2015）では、韓国語を母語とする中級話者と上級話者の日本語OPIデータを利用して、各レベルにおいて使用された漢語を抽出し、漢語と同形の漢語が韓国語に存在しているかを見た。本稿では、これに超級の日本語OPIデータを加えて、選択された語彙の特徴、および韓国語からの転移の影響を見る。そのため、韓国語母語話者の日本語OPI（以下、「日本語OPI」を「OPI」と略す）を分析対象とし、判定の難易度ごとに漢語の延べ語数と異なり語数を比較する。分析の具体的な方法と手順は3.1、3.2のとおりである。

3.1 調査方法

OPIデータは、国立国語研究所の日本語会話学習者データベースで公開されており、2023年現在では超級話者のOPIは9本である。そのうち、話者の母語が韓国語であるものは7本であるため、本稿では、その中から収録時期が最も新しいもの4本を分析対象とした。比較対象としては、高木（2015）で使用した中級4本、上級4本の合計8本のOPIデータを使用した。中級のOPIは、「KY コーパス ver.1.2」³において、中級-中と判定された6本のうち、ファイル番号が新しい順に4本採用した。上級は、筆者が行ったOPIデータの4本を用いた。

分析にあたっては、インタビュー어의発話は削除し、被験者の発話のみ

を対象とした。発音に誤りのある語のうち、前後の文脈や発音から語彙が容易に類推できるものは、バリエーションの一つと捉え、解析対象に含めた。語として成立していない発話や、不完全な言い差し、フィラーは解析対象から除外した。これらの作業を行った後、被験者の発話テキストを国立国語研究所の形態素解析ツール「web 茶まめ」にかけ、形態素分析を行った⁴。形態素解析の結果には、一部ではあるが誤りが生じるため、解析結果を確認し、解析結果の一部の修正を行った。

分析対象としたOPIの発話者情報をまとめたものを表1に示す。発話者番号の（ ）にある数字は、それぞれのコーパス、データベースにおいて付与されているファイル番号であり、各項目の「—」は記録なしを意味する。KY コーパスにおいては発話者情報は公開されていないため、すべての欄を「—」としたが、KY コーパスの説明に「ほとんどすべての被験者が大学や日本語学校等での学習によって日本語を習得した者」ということが明記されている。

表1 発話者情報

発話者番号（データ出典）	JLPT ⁵	OPI判定 ⁶	学習歴	日本滞在歴
S1（KYコーパス KYkim01）	—	中-中	—	—
S2（KYコーパス KYkim02）	—	中-中	—	—
S3（KYコーパス KYkim03）	—	中-中	—	—
S4（KYコーパス KYkim04）	—	中-中	—	—
S5（高木2014）	N1	上-中	4年	4.5ヶ月
S6（高木2014）	N1	上-上	11ヶ月	4ヶ月
S7（高木2014）	N1	上-上	5年	4.5年
S8（高木2014）	N1	上-上	2年	3年
S9（日本語会話学習者データベース202）	N1	超	6年	10年
S10（日本語会話学習者データベース323）	—	超	2年	5年
S11（日本語会話学習者データベース338）	N1	超	8年	22年
S12（日本語会話学習者データベース349）	—	超	2年? 3年	15年

3.2 抽出する漢語について

次に、3.1の手順に従って形態素解析を行った後、漢語として区分されたものの中から固有名詞と数詞を除いて、「名詞」、「副詞」、「形状詞」に

分類されたものを抽出した。さらに、韓国語との対比のため、意味範疇の区別が難しい漢字1字の語彙は排除し、2字からなる漢語に限定した。

4. 分析

4.1 タスクのレベルと漢語の数

OPIの分野において語彙に言及されているものに、牧野（2020）が示した正確さに関する指標がある。これは、1986年版のACTFLのプロフィシエンシー・ガイドラインに示されていたものを牧野（2020）がまとめたものである⁷。上級、中級レベルの正確さに関連して漢語についての言及があるため、表2に紹介する。

牧野（2020、p.9）

表2 正確さ

	文 法	語 彙	発 音
超級	基本文法に間違いがない。低頻度の文法には間違いがあるが伝達に支障は起きない。	語彙が豊富。特に漢語系の語彙を駆使できる。	誰が聞いてもわかる。母語の痕跡がほとんどない。
上級	統括された複段落で話せる。	漢語系の抽象語彙の部分的コントロールができる。	外国人の日本語に慣れていない人にもわかるが、母語の影響が残っている。
中級	高頻度の文法はかなりコントロールされている。	具体的で身近な基礎語彙が使える。	外国人の日本語に慣れていない人にはわかる。
初級	語・句のレベルだから文法はないに等しい。	わずかの丸暗記した基礎語彙や挨拶ことばである。	母語の影響が強く、外国人の日本語に慣れている人にもわかりにくい。

表2の語彙の欄に示されている記述を見ると、上級、超級においては抽象的な漢語を備えている必要があり、かつ語彙も数的な豊富さが求められることがうかがえる。そこで、タスクの遂行と漢語の数の関係について4.2の方法で測定し、結果を5で見ることにする。

4.2 語彙の多様性の測定方法

各被験者によって用いられた語彙の多様性を見るために、延べ語数、異

なり語数を測定する。先の2の先行研究で見た橋本（2014）では、語彙の多様性はGuiraud値によって測られており、書きことばにおいて、上級相当と思われる説明型のタスクにおいては語彙の多様性がみられることが指摘されている。語彙の多様性とは、「そのタスクを達成するためには、どれくらいの種類の実質語を必要とするか」（橋本2014、p.289）ということを示す。延べ語数に対して異なり語数が多ければ、そのタスク達成のために用いられた語彙の種類が多かったということになり、逆に延べ語数に対して異なり語数が少なければ、運用された語彙の種類が少なかったということになる。本稿においては、橋本（2014）に倣い、用いられた漢語の延べ語数と異なり語数からGuiraud値を求め、話者ごとの語彙の多様性を測ることとする。Guiraud値は、Type（異なり語数）をToken（延べ語数）の平方根で割った値であり、値が高い方が語彙の多様性が大きいということを示す。

5 結果

3.2の基準によって抽出した2字漢語の語数を計算し、4.2で見たGuiraud値を算出した。話者ごとの数値を以下に示す。

表3 話者ごとに見た2字漢語

発話者番号（データ出典）	OPI判定	延べ語数	異なり語数	Guiraud値
S1（KYコーパス KYkim01）	中－中	124	55	4.9
S2（KYコーパス KYkim02）	中－中	154	74	6
S3（KYコーパス KYkim03）	中－中	178	84	6.3
S4（KYコーパス KYkim04）	中－中	154	82	6.6
S5（高木2014）	上－中	184	82	6
S6（高木2014）	上－上	274	105	6.3
S7（高木2014）	上－上	215	100	6.8
S8（高木2014）	上－上	244	105	6.7
S9（日本語会話学習者データベース202）	超	257	129	8
S10（日本語会話学習者データベース323）	超	258	138	8.6
S11（日本語会話学習者データベース338）	超	252	138	8.7
S12（日本語会話学習者データベース349）	超	309	166	9.4

5.1 語彙の多様性

表3のGuiraud値を見ると、身近で具体的な事柄を話すことが要求される中級から、事物の詳細な叙述が必要とされる上級、さらに時事問題や社会の変化などについての説明、意見の叙述、仮説の構築が要求される超級へとタスクが難しくなるにつれ、用いられる語彙数とともに語彙の種類が増加していくのがうかがえる。異なり語数の平均をレベル内で計算すると、中級では75前後、上級では100前後、超級では140前後となり、Guiraud値の平均は中級で6、上級で6.5、超級では8.7となる。とくに延べ語数の差に関し、上級と超級の違いを詳しく見ると、上級のS6は274となっており、超級のS9、S10、S11の3名を上回っている。しかし、異なり語数は105であり、超級の平均140を大きく下回っている。上級、超級の話者全体をGuiraud値でみた場合、超級の4名全員が上級の4名全員に対し、大きな差をつけて上回っていることが分かる。

一方で、中級と上級の差がどうなっているのかを比べてみると、上級と超級で見たほどの差は見られないことが分かる。例えば中-中のS4と上-上のS5を見た場合、述べ語数は中級のS4の方が少ないものの、異なり語数はS4が上級のS6を上回っており、Guiraud値はS4が6.6、S5が6となっている。他方、S4と同じ中級のS1はGuiraud値が4.9であり、低い数値ではあるものの、中級のタスクが遂行できている。このように考えると、中級から上級レベルのタスク遂行においては、漢語の語数もさることながら、話題に合った語彙選択の適切さと質の高さが重要である可能性がある。

ACTFLの判定尺度における主要レベルを図1に示す。牧野（2020、p.8）では、「言語を使って、自分なりの伝えたいことを産出することができ、身近な話題について簡単な質問をしたりそれらに答えたりでき、単純な場面や取引に対応できる」のが中級話者であり、「主要な時制枠においてナレーション（体験談など）と描写ができ、複雑さを伴う日常的な状況に対応できる」のが上級話者、「意見を裏付けて述べたり、仮説を打ち立てたり、具体的かつ抽象的に話をしたりすることができ、不慣れな話題や場面にも対応できる」のが超級であると説明している。

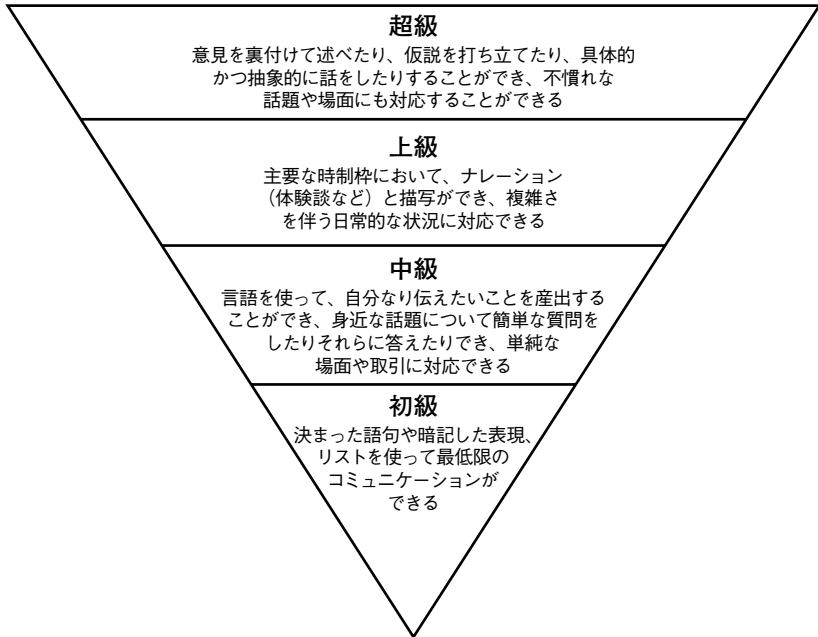


図1 ACTFL-OPIの判定尺度と総合的タスク

(牧野2020、p.8より)

秋元(2019、p.36)は、日本語における語彙のカバー率に触れ、日本語は他の言語に比べ語彙のカバー率が低いと指摘している。試みとして、S9、S10、S11、S12が使用した2字漢語に共通する漢語がないか見たところ、4名全員が使用した漢語は「一緒」の1つのみしかなく、次に3名が使用した漢語は「以外」「一般」「意味」「会社」「学校」「関係」「教育」「経験」「結構」「今回」「最近」「趣味」「大学」「内容」「必要」「文化」「本当」の17にとどまった。4名が使用した異なり漢語の平均は143語であるから、12%程度の共通となる。具体的な話題は異なっているが、同一形式のテストにおける産出結果であることを考えると、予想以上に低いと言える。このように考えると、学部留学生の産出に関わる日本語能力が中級、上級から超級に到達するまでには、抽象的な事柄を表す漢語だけではなく、話題や分野に合った漢語を数多く習得する必要があると示唆される。

5.2 接尾辞、名詞と動詞の共起関係

超級においては、「人間関係」「自己開示」など、2字漢語同士をつなげて抽象性の高い概念を示す語彙が用いられることも多く見られた。また、「首都／圏」「職業／観」のように、2字漢語に接尾辞をつけて抽象性の高い表現がなされることも多かった。このような複合的な表現において、誤用は見られなかった。

表4 超級話者の接頭辞・接尾辞の使用数

発話者番号（データ出典）	接尾辞 漢語 延べ／異なり
S9（日本語会話学習者データベース202）	41 ／ 10
S10（日本語会話学習者データベース323）	42 ／ 18
S11（日本語会話学習者データベース338）	26 ／ 15
S12（日本語会話学習者データベース349）	55 ／ 20

表4を見ると、接尾辞の使用については、超級話者の中でもさまざまである様子が見られた。S9においては、延べ語数の割に異なり語数が少ないため、接尾辞としては「的」など非常に限られた接尾辞のみを使用している様子が見られた。また、S11においては延べ語数も異なり語数も少なく、「的」の他には「産業界」「精神面」のように3字漢語のような固定的な使い方がされていた。S10、S12においては、S9と同様に、最も使用が多かった接尾辞は「的」であったが、それ以外の接尾辞の種類も多く、抽象的な意味を持つ語彙として使用している様子が見られた。OPIテストの間では、経験的に、接尾辞を使うのは超級話者だとも言われることもあるが、「的」は接続できる語彙の選択範囲が比較的広く、使用も容易であるため、超級話者の使用語彙の特徴としては、「的」以外の接尾辞の使用を見た方が良いのかもしれない。

6. 韓国語との類似

6.1 同形の漢語について

2の先行研究において、高木（2015）、尹（2016）で見たように、日本語と韓国語における漢語は、同じ漢字を使用し、発音、意味、用法が類似していることが多い。そこで、これら類似の漢語を「同形」と呼ぶこと

とし、語彙が担う中心的な意味がおおまかに一致するかどうかの確認を行った。分析にあたっては、3で得られた超級話者の解析結果を利用し、高木（2015）の分析結果と比較を行った。韓国語を母語とする2名のインフォーマントの協力を得て、発話に用いられた語彙の同形の有無と大まかな意味一致の確認を行った。意味のゆれがあるものに関しては、辞書の記述を手がかりとした。

6.2 同形と意味の一致

表5の「同形有り」は、当該語彙の漢字を韓国語読みした場合、同音か、またはそれに近い発音をする語彙の有無を見たものである。意味一致の「○」は非常に大まかにではあるが、基本的な意味が一致する、「△」は意味の一部が共通する、あるいは一般的ではないが辞書に記述がある、「×」は違う意味になる、「同形無」は、その漢字を用いた2字漢語はないことを示す。分類にあたり、両言語における語彙の品詞・文法的差異、語用論的な正用・誤用、スピーチレベルや文脈、場による制限などの考慮は行わなかった。

表5 タスク達成のために用いられた漢語と同形の韓国語の有無と意味一致

発話者番号（データ出典）	異なり 語彙数	同形 有			同形 無
		意味一致 ○	意味一致 ×	意味一致 △	
S 1（KYコーパス KYkim01）	55	42	2	3	8
S 2（KYコーパス KYkim02）	74	65	0	1	8
S 3（KYコーパス KYkim03）	84	73	3	1	7
S 4（KYコーパス KYkim04）	82	68	1	4	9
S 5（高木2014）	82	66	0	4	12
S 6（高木2014）	105	91	0	3	11
S 7（高木2014）	100	86	0	5	9
S 8（高木2014）	105	91	0	4	11
S 9（日本語会話学習者データベース202）	129	113	1	0	15
S10（日本語会話学習者データベース323）	138	127	0	2	11
S11（日本語会話学習者データベース338）	138	122	1	0	15
S12（日本語会話学習者データベース349）	166	147	3	1	15

表4を見ると、中級から超級に至るまで、韓国語に同形の漢語が多くあることが分かる。超級において、日本語と同形の漢語はあるが、意味の一致がしない韓国語としては、「(副詞としての) 一体」「電車」「(接尾辞としての) 同士」「都合」「定職」があげられた。また、「機関」など、同形ではあるが、限定的な一部の意味が共通するものは意味一致を△とした⁸。また、発話中では「専業の方」として使われていた「専業」は、日本語においては「専業農家」のように複合的にも、「専業」単独でも使用が可能であるが、韓国語においては単独での使用がされないため、意味的に一部のみ一致と分類した。

同形の漢語はないが、韓国語では似ている別の漢字が使われる語彙として、「少子」があった。日本語では「少子化」「少子高齢化」のように他の語彙とつなげて使われることがほとんどであるが、韓国語の場合は「저출산」(低出産)となり、少子化の意味を表す。同形の漢語が韓国語にない日本語の漢語は他にもあったが、いずれの場合も、意味の非対称が原因となっている誤用の使用例はなかった。

他方、名詞と動詞の共起関係に広げると、一例だけ次のような誤用があった。

(教育を抜本的に変えるためにはどうすればいいかという叙述)

S9: は一 抜本的に んーそうですね 日ごろ現場でがんばってる先生たちをもうちょっとその苦勞を認めてあげる といふか

(日本語会話学習者データベース kaiwa_202)

日本語では「努力を認める」「勞に報いる」などの共起はあるが、「苦勞」と「認める」の共起はない。この発話にある「苦勞を認める」は、韓国語で「勞苦に感謝する」という表現に影響をうけたのではないと思われる。しかしながら、数多く見られた名詞と動詞の共起関係にかかる誤用はこの1例ぐらいであり、他は「記憶に残る」「空気に触れる」などのように、抽象的な概念が叙述されている様子が見られた。

7. まとめ

本稿では、OPIで使用される漢語の特徴を見るため、中級、上級、超級のOPIデータから2字漢語を抽出して分析を行った。その結果、使用され

る漢語の種類の数において、上級と超級の差は、中級と上級の差より多いこと、漢語の語彙数の豊富さが上級から超級レベルのタスクの運用を支える言語能力の1つになっていることを見た。また、超級で使用された漢語を韓国語における漢語と対照した結果、85%程度の漢語が韓国語と同形をもっており、同形を持たない漢語は10%程度であることが分かった。また、他の漢語とつながり複合的な語となる場合は、両言語における漢語にはそれぞれ異なる制約があるのではないかということがうかがわれた。また、同形の漢語の有無は、超級レベルにおいては誤用と直接のつながりがないことが示された。

学部留学生が熟達した日本語の使用者となるには、大きな壁を乗り越える必要がある。しかし、まずは留学生の専門分野や、広く共有できる社会的话题から共起関係も含めた語彙を増やしていくことがのぞまれよう。

注

- 1 ACTFLが公表しているCEFRの比較表。
https://www.actfl.org/uploads/files/general/Assigning_CEFR_Ratings_To_ACTFL_Assessments.pdf
- 2 Oral Proficiency Interview Test. ACTFLのガイドラインに従い、インタビュー形式を取りつつ、テストが被験者の日本語運用能力を測るテスト。30分で行い、異なるレベルであっても同一の形式で行うため、比較がしやすい。
- 3 「KY コーパス」は、90人分のOPIテープを文字化した言語資料である。中国語、英語、韓国語がそれぞれ30人ずつで、30人のOPIの判定結果別の内訳は、それぞれ、初級5人、中級10人、上級10人、超級5人ずつとなっている。K詳細は山内（2014）で言及されている。
- 4 「web 茶まめ」は国立国語研究所で公開されている形態素解析ツールである。現代語用、古文用のUniDic辞書、形態素解析器としてMeCabが利用されている。
- 5 日本語能力試験。N1は、「幅広い場面で使われる日本語を理解することができる」（『新しい「日本語能力試験」ガイドブック』凡人社、2009、p.19）とされている。
- 6 高木（2015）のOPI判定は、筆者が行い、セカンドレイティングを別の1人が行った。ACTFLの尺度では、初級、中級、上級、超級の主要レベルに加えて、主要レベルの中に3つの下位レベルが設定されている。例えば、「中-中」は主要レベルとしては中級であるが、中級タスクがやっとなぜかというレベルである。「上-上」は、主要レベルが上級にあり、上級タスクを余裕を持って達成できるレベルであることを指す。
- 7 現在のACTFLのガイドラインは、2012年版であり、各言語の運用能力を同一の基準で判定できるよう改訂されたものであり、個別言語の特性には触れられていない。
- 8 意味一致を△としたものには「機関」「繁華」「専業」があった。

参考文献

- 秋元美晴（2019）『よくわかる語彙』アルク
- 国際交流基（2017）「JF 日本語教育スタンダードに基づいた評価と日本語能力試験の合否判定との関係 ―最終報告書」『JF 日本語教育スタンダードに基づいたパフォーマンス評価と日本語能力試験の合否判定との関係』
- 高木南欧子（2014）「韓国留学生の自然発話に見られる誤用」『神奈川大学言語研究』vol.22 神奈川大学言語研究センター pp.141-158
- 高木南欧子（2015）「韓国語母語話者の自然発話における漢語の使用」『神奈川大学言語研究』vol.37 神奈川大学言語研究センター pp.27-46
- 橋本直幸（2014）「語彙調査に基づくタスクの分類」『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』金澤裕之編 ひつじ書房 pp.287-303
- 文化審議会国語分科会日本語教育小委員会（2022）『『日本語教育の参照枠』の活用のための手引き』文化庁
- 文化審議会国語分科会（2021）『日本語教育の参照枠（報告）』文化庁
- 牧野成一（2020）「OPIのすがた」『OPIによる会話能力の評価』鎌田修・嶋田和子・三浦謙一編 凡人社 pp.28-59
- 山内博之（2003）「OPIデータの形態素解析 ―判定基準の客観化・簡易化に向けて」『実践女子大学文学部紀要』45 実践女子大学文学部 pp.1-10
- 山内博之（2004）「語彙習得研究の方法 ―茶筌とNグラム統計」『第二言語としての日本語の習得研究』7 第二言語習得研究会 pp.141-162
- 尹亨仁（2014）「日韓両言語における漢語動詞の『負の転移』をめぐって ―2字漢語動詞を中心に」『神奈川大学言語研究』vol.37 神奈川大学言語研究センター pp.1-26
- 尹亨仁（2016）「韓国語の漢語動詞・漢語形容詞の語彙調査 ―『デイリーコンサイス韓国辞典』（2009、三省堂）の分析を中心に―」『人文学研究所報』No.55. 神奈川大学人文学研究所 pp.21-30

参照資料・参照ウェブサイト

- Assigning CEFR Ratings to ACTFL Assessments, ACTFL
https://www.actfl.org/uploads/files/general/Assigning_CEFR_Ratings_To_ACTFL_Assessments.pdf 閲覧日 2023年11月5日
- 「Web茶まめ」国立国語研究所
<https://chamame.ninjal.ac.jp/index.html> 閲覧日 2023年11月5日
- 「日本語学習者会話データベース」国立国語研究所
<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/kaiwa/index.html> 閲覧日 2023年11月5日